「魂の芸術家」たちのアートと生命をおりなす新しい芸術運動

「ABLE ART MOVEMENT」プロデューサー
播磨靖夫
YASUO HARIMA

心の不思議なはたらきを表現

ほんとうは、この世界はそうとう光に満ちあふれているにちがいない。変容の魔術で色彩が豊かに輝いている「魂の芸術家」たちの絵画のように。ほんとうは、この世界はたった今かたちになったばかりにうるうるとしているにちがいない。生命のぬくもりが感じられる実在感あふれた「魂の芸術家」たちの造形のように。けれども、普通の人間にはそれが見えない、それが感じることができない。

わたしたちの心の海にひびくアート。わたしたちの心の森にこだまするアート。わたしたちの心の宇宙にとどくアート。時空を超えた宇宙観にもとづくアートが、今ほど求められているときはない。生命の衰弱した現代空間には、魂に躍動をあたえ感性の復権をもたらす、生命をおりなす新しい芸術運動が必要となっているからだ。

生命をおりなす芸術運動を最初に試みたのは、心の宇宙を表現した芸術家、宮沢賢治ではないだろうか。その世界はいつも新しく、渇きを癒(いや)す水のごとく愛されているが、宮沢賢治は「修羅」を生きた人であった。普通の人間なら、お金儲けにあくせくしたり、出世を気にしたり、名声を望んだりする。ところが、そういう欲望と次元のちがうところから発想し行動した。そして、人間の欲望や人間の悲しみの葛藤の泥沼から美しい花を咲かせた人であった。

仏教では「修羅」というのは、人間の下にあるもの、という意味になる。深層心理学でいうところの、自我にたいする無意識みたいなもの、つまり深層でおこる心の不思議なはたらきである。それをユングは「魂」と呼んでいるが、その心の不思議なはたらきを抑えつけるのではなく、活かしていこうとするのが「修羅」を生きることであった。

このような生き方は人間の生を豊かにする。人間として面白く生きることにもなる。その生涯を「でくのぼう」として生きた宮沢賢治は、「修羅」という中心から外れた存在であったがゆえに、「わたくしといふ現象」、つまり「魂」の現象がよく見えていた。そして、人間をつき動かしている「魂」のはたらきを生き生きとしたイメージで表現した。

宮沢賢治と同じように障害をもつ人たちもまた、中心から外れた存在であるがために、普通とはちがう次元の世界が見えるし、感じることができる。そして、心の不思議なはたらきにつき動かされて表現する。

わたしたちが提唱している「ABLE ART MOVEMENT」(可能性の芸術運動)が、そのような創造活動をする障害をもつ人たちを「魂の芸術家」と名づけたのも、彼らが西洋近代の思考の枠では定義しきれない「魂」の現象を表現していることに気づいたからだ。

心に優しくふれてくるアート

このような「魂の芸術家」たちが生みだすアート、つまり人間の心の不思議なはたらきによって創造されるアートが、見るものの心に優しくふれてくるのはなぜだろうか。そして、忘れていた何かがこみ上げてくるのを感じさせるのはなぜだろうか。

それは、かつては存在し、そのものを体験しながら、今は失われてしまったものがあるからだ。この失われたものは、なお記憶のなかにとどまっているものもあれば、すでに無意識のうちに埋没してしまったものもあるが、それを呼び覚ますような刺激にあうと懐かしさをともなってよみがえってくるのである。

それはまた、もともと人間がもっていて、近代化や社会化のプロセスで失ってしまったものといってもよい。それを「魂の芸術家」たちは、ときには過剰なまでの豊かさで、ときには極端なまでのシンプルさで暗示してくれる。だからこそ、わたしたちは、その

アートを学びそのアートに親しむことに大いなる歓びを感じる。

わたしたち人間はさまざまな可能性をもって生まれてくる。なかでも普通の人間とは次元のちがう可能性をもった人もいる。共感覚という能力もそのひとつである。共感覚というのは、音を聴くと色彩や情景を思い浮かべたり、生き物と交感できるような特異な感覚のことである。心の宇宙を表現した宮沢賢治も、このような共感覚という能力をもっていたといわれる。

このような能力は西洋近代文明に汚染された大人にはまれだが、文明におかされていない未開人や子どもにも見られるものである。それは人間の感覚が五感として分化する以前の未分化な感覚である。宮沢賢治のような天才、文明におかされていない未開人、子どもたちは感度が高いため、感覚がおたがいに通底して生じるものだといわれている。

今から25年前のことだが、そのような能力をもつ絵の天才にであったことがある。山村昭一郎という知的に障害がある人で、チョウチョウ、トンボ、カブトムシ、カエル、リスといった小さな生き物ばかりを30年来描きつづけていた。

小さな生き物の絵を描きだしたのは、小学校に入学した11歳のときだった。教室を飛びだしてチョウチョウやトンボを追いかけたり、小さな生き物になみなみならぬ興味を示すのを見て、担任の先生が画用紙をあたえたのがはじまりだった。

彼が知っている昆虫の数は、ざっと2000種類、そのうち200種類を野原で生きている姿そのものに生き生きと描くのである。それもそのはず、彼は小さな生き物と同じ世界に住み、交感する能力をもっていたからである。

このような知的に障害をもっているが、音楽や絵画などに特異な才能を見せる天才をイディオ・サバンと呼んでいた。特異な天才画家として注目されていた山下清と同じころにその才能を発見されたが、彼の場合、その特異な才能を「売り物」にしなかったため、一部の人たちだけに知られた存在として生涯をすごした。

だが、このような能力は決して特異なものでない。わたしたち人類は原始の時代から、人間と動物が境を超えて交感したりするアニミズム的な世界、山川草木全体が生き生きと交流するアニマティズム的な世界を体験してきた。また、個人の歴史のなかでも日々新しい発見をしている子どものころに体験してきた。

誰もが特別の芸術家になれる

特異な才能に見られるすごくおもしろい感覚は、わたしたち凡人を超えたところがあるが、だからといって、特別の存在というわけではない。むしろ、人間として本来あるべき可能性を暗示する、ありうべき人間の原像を示す存在と考えたらよいのではないか。

この世界には四季おりおりの花を見て心から感動できる人と、そんなものはまったく目に入らない人がいる。人間としてどちらの欲望が健全かというと、咲きそろう花を見て幸福になれる人のほうではないだろうか。そして、そのときにおこる心の不思議なはたらきを自分の世界にとどめないで、想像力の世界にむけられる人が「芸術家」になれるのだ。つまり、特別の人間が芸術家になれるのではなく、人間として生まれもった可能性を十分に花開かせることによって、誰もが特別の芸術家になれるのである。

宮沢賢治もそう考えた。その「農民芸術概論」のなかで「誰人もみな芸術家たる感受をなせ／個性の優れる方面に於いて各々止むなき表現をなせ／然もめいめいそのときどきの芸術家である」と書いている。

その芸術論によれば、芸術をつくる主体は、芸術家ではない一人ひとりの個人、芸術

家らしくないなんらかの生産的活動にしたがう個人であった。そして、芸術とは主体となる個人あるいは集団にとって、それをとりまく日常的状況をより深く美しいものにむかって変革する行為であった。したがって、状況の内部のあらゆる事物が、新しい仕方でとらえられ、価値づけられることを通して芸術の素材となる、と考えた。

「セロ弾きのゴーシュ」という物語に、その考えがよく表われている。主人公のゴーシュは、町の映画館で楽隊と一緒にセロを弾いている素人音楽家である。その演奏があまりにも下手なので、みんなに馬鹿にされ、しょげかえる。田舎のあばらやに帰り、そこにやってきた猫、かっこう鳥、狸の音やリズムに聞き入るところから、新しいきっかけをつかんで、ついには名人となる。

「職業人として芸術家になる道をとおらないで生きる大部分の人間にとって、積極的な仕方で参加する芸術のジャンルは、すべて限界芸術にぞくする」という「限界芸術論」を発表した鶴見俊輔は、「セロ弾きのゴーシュ」を例に引いて、素人音楽家が限界芸術家に変貌するきっかけは、職業芸術家の模倣からはなれて、自分の身近にある環境そのもののなかに芸術の手本を発見することから、と次のようにのべている。

「ひとりが急に芸術家のやっているようなことをまねしてみたくなる。下手であってもわらってはいけない。そばのみんなが助けてやるべきだ。そうして一生懸命練習しているなかで、彼が表現しようとしている別のより深い音楽をきいてやるのがよい。こうした見方、きき方、解釈をとおして、シロウト芸術もまた新しく変貌する」(「限界芸術論」)

かつてビートルズがリズム・アンド・ブルースのコピーをやめ、「君も自分の歌いたい歌を、自分の歌いたいように歌えばいい」と、時代にむけて新しい音楽言語でみずからのメッセージを送りだしたことを思ってほしい。

このような限界芸術は、純粋芸術（PURE ART)、大衆芸術（POPULAR ART）よりもさらに広大な領域をもち、芸術と生活の境界線にある周縁芸術（MARGINAL ART）といえる。この周縁芸術は、地上にあらわれた芸術の最初のかたちでもある。純粋芸術、大衆芸術を生む母体でもある。まさに芸術の生命の源であるのだ。このような生活様式でありながら芸術様式でもあるような両棲的な位置をしめる周縁芸術に新しい評価をあたえることは、現代のアートに重大な意味をもつことになる。

人間に希望をあたえる新しい芸術

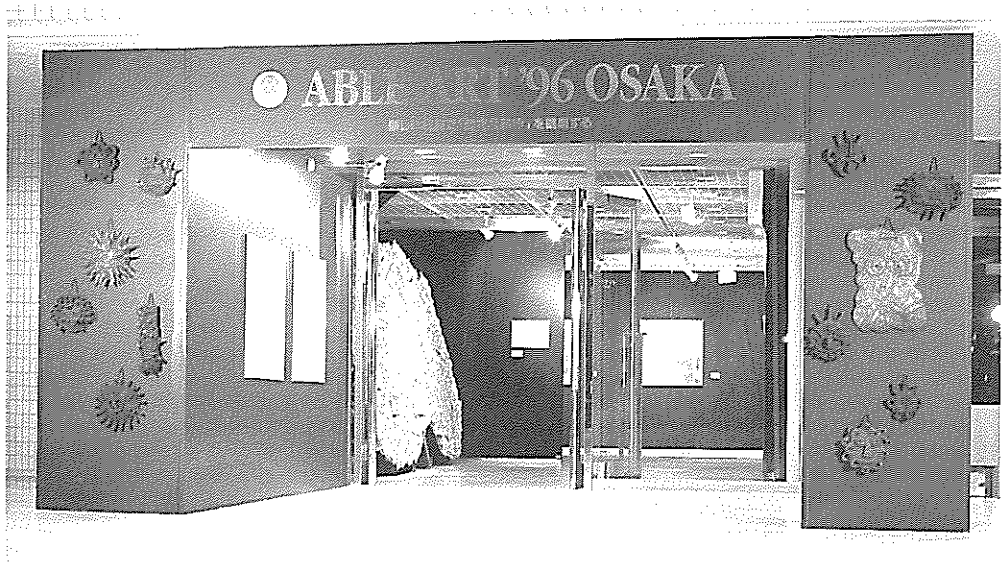
これまで「魂の芸術家」たちがつくる、いわゆる「障害者芸術」は、福祉というフィルターをとおして見られるため低い評価しかえられなかった。現代のアートからはまったく無視されるか、特殊なポジションしかもらえなかった。しかし、現代のアートが生命力を失いつつある現在において、始原のエネルギーに満ちあふれた「障害者芸術」を新しい視座で評価し、生命をおりなす新しい芸術運動として発展させていこうというのが、わたしたちの「ABLE ART MOVEMENT」の提案である。

障害をもつ人たちにも、笑いや悲しみといった感情表現をふくめて、さまざまなかたちで自己表現したい欲求はある。それは他人から認められたい、多様な世界を自分のものにしたい、他人と共通の世界をもちたい、という欲求でもある。その自己表現の仕方も、生の衝動というべき激しさ、あるいは生々しさをともなうことが多い。それはまた、生のエネルギーの解放でもあり、自己の癒しとなってゆくのである。そして、自己の癒しを超えて他人の癒しとなったときに「魂の芸術家」たちのアートに可能性が生まれてくる。

このようなアートにたいして、これまでの「芸術鑑賞」のありかたを変えなければならない。これまでだと、誰が描いたのか、何が描いてあるのか、いかに描いてあるのかが観者の重大な関心事であった。もちろん、それらも重大なことにちがいないが、これからは誰がどのように見たのか、という問いがますます重要になってくると考えるからだ。

たとえば、絵画の場合、一方に壁にかかった額縁の絵があり、他方にそれを見る鑑賞者がいる。これまでは、そのような絵と人間の一方的な関係でアートは成り立っていた。しかし、わたしたちは作者と観者の「魂の対話」を重視し、「鑑賞から観照へ」というキーワードで作者と観者の新しい関係性を提案している。

さらにいえば、個人的な観者の眼によって「所有」されるよりは、不特定の人びとによる身体的な「参加」をうながすようなもの、いいかえれば、視覚に訴えるよりは触覚に訴えるといったほうがよさそうな、物質と無意識の世界のあいだに動く不可思議な力を新たな方向としているのである。

いつのまにか、わたしたちの世界は無機質なものにおおいつくされ、人びとは生気の失った狭い感覚の世界に閉じこもるようになってしまった。宮沢賢治は、その宇宙観がもっている方法論で表現することによって、近代人が閉じて久しい「知覚の扉」を解放した。一方、「魂の芸術家」たちは、これまでのアートの認識と思考の方法論だけではないちがう方法で表現することによって、さびついた人びとの「感性の扉」を解放し、その魂に新鮮な息吹をあたえようとしている。

今、新しい芸術が求めているのは、装飾的にただ美しいという視覚の美ではない。時空を超えて人間の永遠性につながるもの。人間がそれを受けると希望があたえられる、まさに元気のでるような美である。そのような新しい芸術の美を「魂の芸術家」たちのアートは表現しているのである。